

チェンマイ大学での貢献 (58)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

本報では筆者が継続して実施している日本語講座について報告する。チェンマイ大学の研究業務センター(RAC, Research Administration Center)でのアドバイザーとしての身分を頂き、このセンターに週に一度足を運ぶようになってから久しい。記憶が定かではないがおそらく短く見積もっても3, 4年前かと思われる。業務の内容はとりあえずアドバイザー(Adviser)と言うステータスを拝命しているので必要に応じて助言をする、と言う事になっているがこれだけでは無く海外の大学からの訪問客の接待やRACが主催する国際ワークショップやシンポジウムでの基調講演や参加者としての出席などであるが、2, 3年前から要請を受けて始めた職員のための日本語講座がある。週に一度、時間にして1時間をこの講義に当てている。始めた当初は興味もあって30名以上の大多数の職員(Staff)が参加し、大きな部屋でマイクをもってPPT(Power Point)を指し示しつつ話をすると言うほどの盛況であったが、日本語の難しさもあってか、目に見えた進展がすぐに確認出来ないと諦めも出てきて「もう駄目だ」という落伍者が増え、現在は7, 8名の参加者である。日本語に限らず、他の言語でも同じように日増しに目に見えた進展が確認出来ると益々興味が増し積極的に挑戦するが、その進展の度合いが顕著でないと諦めに転じる。教える側もそうしたものと躊躇を隠せないが、なかなか適切な対応が出来ずに、しばしマンネリ化の状況で事が運ぶ。手を変え品を変えて内容に「興味を引く」題材を意識して選ぶがなかなか難しい。週に一度で3年以上もこうした授業を自主的に継続して来たのでどの程度の回数をこなしたのかを振り返ると、1ヶ月で4週間であるから1年は12ヶ月で約48回、3年ともなると144回と言う事になる。しかし諸般の事情で授業をキャンセルした事もあるからこの回数を半分に見積もっても80回以上には成る。気がつかなかったがまさに”ちりも積もれば山となる”である。残念ながらこの授業に参加しているスタッフがどれだけ日本語でのコミュニケーション能力がついたかとなると、未だに極めて低いところと判断する。やはり興味の維持と教授法に工夫を凝らす必要性を感じている。

話は少しそれるが、かつて工学部の院生の数人から英語でのプレゼンの仕方について指導して欲しいという申し出があった。週に一度約1時間から1時間半を継続したが、数ヶ月してから時には時間に遅れる者が増え、果てには全員が欠席という事態が発生した。こちら腰砕けになり、また失望も手助けして「こちらから頼んだわけでもないのに何と言うことか」と愚痴もである。欠席するならするで連絡ぐらいはあっても良いでは無いか、といささか感情的にも成る。たまりかねて「依頼してきたのは貴方がたではないか、それでいて約束を守れないのはいかがなものか」と一喝した。なかなか言いにくいことではあるが、「教育のためには心を鬼にして」と自分に言い聞かせて学生の代表に告げた。修士論文のまとめなど時期的に多忙になってきたのかも知れないが、それならそれで予め事情説明なり連絡をすべきであると厳しく戒めた。彼らも自分たちの振る舞いに非を認め、結果としてこれ以上は継続できないと言う事になった。しばらくして「短期間ではあったがお世話になりました」という謝意の表示と申しわけありませんでしたと言う詫びの入り交じった気持ちを表すためかチョットした手土産を持って代表が筆者を訪れた。一応英語でのプレゼン能力向上のための自主ゼミはそれで終わったが、ここでいろいろ考えると彼らの指導教員はどういう気持ちでこの自主ゼミを見つめていたのであろうか。自主ゼミであろうと、正式なカリキュラムで無く自主ゼミという余分な時間を使っての学生達の動きであればこそ「学生達が無理なお願いをして恐縮です。よろしく」という言葉の一つもあって

も良いのでは無いかなどと思ったりもする。学生達が自主的にある先生に話をつけて相手も合意したのであるから、それは指導教員の口を挟むことではない、むしろそうした要請を受け入れた教員の方が挨拶の一つも指導教員が言って来ても良いのではないかと、言う考え方も出来る。筆者はなぜこのような事を考えたかという、もし学生達が自主的に一人の教員にそうした依頼を要請しても、指導教員が一言要請を受けた教員に言葉を通しておけば「果たして学生達は無断で欠席し、結果として自主ゼミを終わらせるような行為を取ったであろうか？」と言う疑問である。筆者にしてみれば指導教員からわざわざ一言言って欲しいとは思わないし、恩着せがましく振る舞うつもりは毛頭無い。基本的にそうした要請や依頼に喜んで応えるのが客員教授として当たり前であり、有り難いことであると認識している。しかし教育という観点から見てみるといささかの寂しさを覚える。やはり筆者が学生達の指導教員であったらどうするかと考えると、迷うこと無く応諾して頂いた先生のところに出向き一言挨拶をしたのでは無いか、またそうすることが指導教員の果たすべき役割であり義務(?)では無いかとさえ考える。卒論や修士論文、博士論文という学術的な事のみならず教育が将来の人間形成に重要であるという事を考えるとやはりきめの細かい学生に対する「教育・人間愛」が今ひとつ足りないのでは無いかとさえ考えるのは筆者の思い違いであろうか。

かつて筆者が在職時代に関わっていた大学レベルのクラブ活動の部員の学生の一人から、クラブ創設 40 周年(?) 記念事業を行うことになったので一言メッセージの寄稿を賜りたいと言うメールが入った。突然でもうし分けないが 3 日以内に頂きたいと言う。かつて顧問をしていたかわいいクラブのことでもあり何とかしたいとの思いで早々に仕上げ返信したが、その後全く連絡が無い。不受信の通知も来ていないからおそらく無事に届いているとは思ったが確認のために問い合わせた。すると依頼してきた学生から返信があつて「ばっちり届いています」という返事であった。それならそれで「なぜ早く受け取ったと言う連絡をしてこないのか」と言う腹立たしさに加えた寂しさを覚えた。「これが今の教育か、何が為の顧問なのか」と言う葛藤も出てきて正直不愉快であった。なぜなら「自分にとって必要なときは相手のことも顧みず無理を通すが、必要なくなったときには平気で切り捨てる」という精神や行為に通じるからである。ちなみに筆者が顧問であったときにはどうしたか、多分同じような事をしたのではないかと懸念はあるが支援を頂いた企業をはじめ、大学の関係部局に案内(招聘状を含む)を出し記念行事の成功に向けた準備をしたものである。部局の中にはわざわざビール 1 ダースを祝儀として届けて頂いた所もある。企業に至ってもわざわざ当日記念式典会場に出向いて頂くところもあった。やはりクラブ活動といえど顧問の役割を明確に認識し、将来的に社会人として巣立つ学生に相応の社会常識を身につけさせておく事が如何に重要か、上記の例からも容易に想像できる。

日常の講義でも、講義を受けに来るのでは無く、出席したと言う証拠を残す為に来るだけで授業中は眠っていたり、他の仕事をして聞いていなかったり、最近ではスマホの普及とともに授業中でもそればかり視ている学生も多い。そうした学生の振る舞いにどれだけの教員が厳しく対応しているかはなはだ疑問である。こうした教育を続けていると毎年輩出される卒業生の評価から早晩その大学のランキングは下がる方向に移動する。クラブの顧問といえど、このレベルではその教えを受けた学生がどのレベルかは想像に難くない。大学教員の身分が新しく変わりより「個人」が重視されるようになった。確かにアカデミックな活動には個人の教育研究活動などが妨げられてはならない。しかし余りにもレベルの低い社会常識がもとで、遙かにずれた人材が出てくるのもこうした背景が無関係ではあるまい。

さて話は元に戻るが、RACでの日本語講座においても工夫が必要である事を認識し対応を考えてきた。日本語の読み、書き、話すと言う 3 点に重心を置いた内容とするのも結

構であるが、一方では日本文化、伝統などを理解してもらおうという観点も意義ある事ではないかと考え試行を繰り返してきたが、辿り着いた結論はPPTによる静止画像では興味や注意を引くことはむずかしく、スタッフも今時の学生と同じでスマホにかじりつくと言う姿勢も普通になってきている。そこで積極的に You tube の動画を授業に用いることにした。さすればディスプレイに映し出される映像を絶えず目を離さずに注視する必要があり、質問も出やすいし内容の理解も進む。幸いにしてスタッフの殆どは英語力が高く、普通にコミュニケーションできるレベルにあるので結構行けると感じた。

そこで最初はスタッフの大多数が日本語講座に興味を持ち、積極的に参加したが現在はその人数はかなり減った。しかしなぜ「もう止めましょう」と言う事にならないのか。それはやはりセンターの長の旗振りで始まった以上は止めるなどとは言い出せないと筆者は理解している。内容の充実と興味を持続させる授業の形式を試行錯誤しつつ辿り着いたのが動画による講義形式である。詳細な補足説明が必要なとき、あるいは質問が出たときは一時的に画像を止めて説明し、その後にもたまたま続けて画像を見せれば良い。自主的であろうと無かろうと組織の「長」(ココでは研究室の指導教員またはアドバイザー、あるいはセンター長)が介在することでプログラムの持続性が決まる。すなわち「長」がこのことを教育と認識して居るかどうかでもある。教える側も教えられる側もこうしたプログラムを通じて飛躍する、いわゆる双方がウイン・ウイン(Win-Win)の関係を維持できれば効果は大きいし、またそれがプログラムの目的でもあるから最終的に「かえって悪い結果に終わった」と言う評価だけは避けた。そのためには、そうした結果にならない対応策が必要であり、その一つが指導教員や組織長の「簡単な一言」がプログラムを成功に導くことを心すべきである。



Fig. 1 研究業務センターで開講している日本語教育の授業風景
日本語と共に日本文化、伝統、宗教、年間行事、通貨、農業（稲作）
などの紹介知識供与の機会にもなる事を目指している。